

主 文
本件控訴を棄却する。
当審に於ける訴訟費用は全部被告人の負担とする。
理 由

本件控訴の趣意は被告人名義の控訴理由書、弁護人鈴木匡名義の控訴趣意書と各題する書面に記載の通りだからここに之を引用する。

弁護人鈴木匡の論旨について、

被告人が昭和二十七年六月五日午前五時頃A、Bの両名から本件靴九足を受け取ったのは同人等の為把贓物と知りながら其の売却を斡旋してやる為であり、被告人が各斡旋の目的でCに対し右売却方を転嘱して同日午後三時頃同靴を引渡していることは、まことに所論の通り原判決挙示の証拠により明白であるが、結局Cの右売却前に事発覚して被告人が右売却斡旋の目的を遂げなかつたものであることも亦同証拠により明白である。

〈要旨〉ところで贓物の牙保といふのは其の売却の斡旋をするととで其の際必ずしも常に贓物の保管、運搬を伴うもの</要旨>ではないが、牙保の目的を遂行する必要上一時贓物を預つたり、運搬したりしても結局売却の斡旋の目的を完遂した際は其の間の贓物の保管、運搬のことは牙保の目的遂行上の一過程として之に吸収され別に贓物の寄蔵、運搬の罪を構成するものではないと解するを相当とはみとめるけれども、本件の如く結局売却斡旋の目的を達しなかつた場合に於ては贓物牙保の未遂がないからといつて其の間に於ける贓物の寄蔵、運搬の事実を不問に附さねばならぬといふいわれは無いと解する。そして右解釈に立つて、原判決挙示の証拠を総合すると、原裁判所認定の贓物寄蔵の事實は明白に認め得られ、本件訴訟記録並に原裁判所で取調べた各証拠を調査しても原審の右認定に誤りがあると疑うべきものはない。所論は結局被告人の前記Cに対する売却の斡旋方転嘱の事実だけから贓物牙保の既遂と誤解したのでなければ独自の解釈に立つて贓物牙保の不成立の場合に於ても其の過程に於て生起した寄蔵の事實は犯罪を構成しないとなすに因るものと認められ、いずれも当裁判所の採用し得ないところだから論旨は理由がない。

被告人の論旨について、

本件訴訟記録並に原裁判所で取調べた各証拠を調査し之にあらわれた被告人の本件犯行の動機、犯行の態様其の前科、経歴、資産、生活の関係等を考慮すると、所論の事情を参酌検討してみても原審が被告人の本件犯行につき懲役五月及罰金三千円を量定したのは相当と認められ右量刑を不当過重と認めるべき資料はないから論旨は採用できぬ。

以上説明の通りだから刑事訴訟法第三百九十六条に則り本件控訴を棄却し、当審に於ける訴訟費用（国選弁護人に支給のもの）は同法第百八十一条により全部被告人をして負担せしめるべきものと認め主文の通り判決する。

（裁判長裁判官 羽田秀雄 裁判官 小林登一 裁判官 山口正章）